

SDGs と森林・林業

－ ODA の現場から －

The SDGs and Forests and Forestry
－ from the field of ODA －

SDGs（持続可能な開発目標）において持続的な森林管理が重要な課題の一つとなっている。森林の持続的管理に関しては、これまで1992年のリオ宣言をはじめ、様々な国際的な取り組みが行われてきた。筆者は、イランでの国際協力の経験から、SDGsにおける「陸のゆたかさ」の達成のためには、地域住民の理解と協力が不可欠であると考えた。

1 はじめに

SDGsにおいて持続的な森林管理が重要な課題の一つとなっている。森林に関する持続性に関しては、1992年のリオ宣言をはじめ、現在も、様々な国際的な取り組みが行われている。

一方、SDGsにおける目標15の「陸のゆたかさも守る」に代表される森林は、そこに生息する動植物や人間生活に様々なサービスを提供している。

すでに、海外の森林・林業協力においては、森林情報整備、REDD+（途上国における森林減少・森林劣化に由来する排出の抑制、ならびに森林保全、持続的な森林経営、森林炭素蓄積の増強）、林産品ビジネス、参加型アプローチの流域管理等、SDGsと共通した考えのプロジェクトが行われている。

筆者は、2010年から6年半、イランにおける参加型森林草地管理プロジェクトに従事した。この結果を踏まえ、ODAの現場から、SDGsの「陸のゆたかさ」を達成するための課題について考えてみる。

2 持続的な森林・林業の流れ

1992年に、ブラジルのリオデジャネイロで環境と開発に関するリオ宣言が採択され、森林の多様な機能の維持、持続的な森林経営の強化が叫ばれた。

2001年に、MDGs（ミレニアム開発目標）

が策定され、8つの目標の7番目の目標として「環境の持続的確保」があり、この目標のターゲットとして森林の破壊防止が挙げられた。しかし、2015年までには、1990年の森林率30.8%には至らなかった¹⁾。

2015年9月には、MDGsの地域間格差などの課題を解決するために17の目標、169のターゲットからなるSDGsが発効した。SDGsの目標15が、森林、林業と関係がある「陸のゆたかさも守ろう」である。

3 陸のゆたかさとは

現在、世界の森林は、陸地面積の約30%（40億ha）を占めている。そこには湿潤から乾燥まで、様々な気象条件にあった森林が分布している。

SDGsの「陸のゆたかさ」の代表は森林であり、人間の側から見た切り口断面として捉えたものである。陸のゆたかさは、そこに生活する住民にとって森林から得られる生態系サービスとも読み替えることができる²⁾。

つまり、生態系サービスの有する生物多様性の保全、水土保持（特に土壌と水資源の保全）、木材などの林産物の生産、保健文化機能などである²⁾。

我々が、海外での森林・林業プロジェクトを考える場合、生態系サービスと人々の生活との関係を頭に入れ、そこに何が必要なのか、どれに重点をおくのかを常に検討しなくてはならない。

4 海外の森林・林業分野での技術協力

1976年から2017年までのJICAを通じた森林・林業分野の技術協力プロジェクトは、42の国・地域で行われ、終了した案件は132件、実施中の案件は20件、累計152件である³⁾。また、2017年には新規継続も含め458名もの専門家

の派遣が行われ⁴⁾、多数の専門家が海外の森林・林業の技術協力に派遣されたものと推定される。

技術協力を分野別についてみると、かつては、森林資源調査、森林管理計画策定調査、治山、木材加工、木材生産であった。近年では、衛星を使った森林情報整備、生物多様性の保全、地球温暖化に係るREDD+、防災・減災をめざした統合的流域管理など、様々な森林・林業プロジェクトが行われている。

森林・林業プロジェクトは、SDGsの他の目標とも密接な関連性がある。たとえば、REDD+のプロジェクトでは、熱帯林の劣化と減少対策を通じた温暖化の緩和（目標13）、外部資金の活用による対策の強化と協力（目標17）が関連している。また、統合流域管理のプロジェクトでは、森林保全に資する生計向上活動の女性の参加（目標5）荒廃した森林の復旧と保全による渇水問題の解決（目標6）、と関連している。このように、他の目標の達成とからめて、持続可能な環境や社会への貢献を目指している。

5 イランでの経験

JICAはイラン政府の要請にこたえるため、2010年から、イラン西部のザグロス山脈のほぼ中心に当たるチャハールマハール州のバゾフト地区をプロジェクトサイトとして、住民参加によるナラ林の回復、保全、利用を目指した参加型森林草地管理プロジェクトを実施した。



写真1 プロジェクト対象地に分布するナラ林

プロジェクト開始当初は、保護区の設置を疑問視する住民の声も聞かれたが、プロジェクトが進むにつれて、植生が回復し、上流からの土砂の流出が減り、これまでみられなかった植物も出現するようになった。女性が参加したマイクロクレ

ジットは規模が小さいものの、女性たちの家計に貢献し、徐々に村内の輪を広げている。

上記のように効果が上がりつつあるものの、森林の持続的管理というものを今一度考えてみると、住民だけで継続していくのは難しいところがある。政府機関の支援、予算の確保、他の機関との連携が必要である。そして持続可能性を確保する上でなにより大事なのは、住民の信頼を得、彼らのモチベーションを上げていくことである⁵⁾。

6 おわりに

昨年、新しいJICAプロジェクトのリーダーとして、2年ぶりに前プロジェクトの現場の村を訪れた。幸い、住民たちによって保護区は維持され、経済性樹種も生育していた。しかし、ナラ稚樹の成長には年月がかかり、果実の収穫にはまだまだ時間が必要である。

SDGsは、2030年を目標年としている。この目標の達成は容易なものではない。特に、森林・林業プロジェクトに関係する「陸のゆたかさ」の実現には、住民の理解、政府機関の支援、そしてプロジェクトの協力など、一步一步、地道な活動を進める必要があると考える。

<引用文献>

- 1) 外務省：ODA白書（2010年度版）、第1章 MDGsの達成状況、2011年
- 2) 藤森隆郎：「森づくりの心得 森林のしくみから施業・管理・ビジョンまで」、pp.75～87、全国林業改良普及協会、2012年
- 3) 林野庁：森林・林業白書、p.81、2019年
- 4) 国際協力機構：JICA年報 別冊資料編（2017年度）、技術協力地域別分野別人数実績、2018年
- 5) 三島征一：「イランのザグロス山系で実施したJICA森林草地管理協力活動事例の紹介」国際農業協力、Vol.40, No.3, pp.42～44、国際農業協働協会、2017年

久道 篤志（ひさみち あつし）
技術士（森林／総合技術監理部門）

一般社団法人 日本森林技術協会
e-mail : atsushi@jafta.or.jp

